

Title	<大會抄録>ファーティマ朝カリフ＝ムイッズ：イスマール派神政君主の像
Author(s)	菟原, 卓
Citation	東洋史研究 (1985), 44(3): 551-551
Issue Date	1985-12-31
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/154118">http://dx.doi.org/10.14989/154118</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

精神のかたちと強烈さが、同時代の人々に強い印象を与え、この時代の學問が形成されるについて大きな力を發揮したのであった。

### ファアティマ朝カリフ・ムイッズ

——イスマール派神政君主の像——

菟原 卓

ファアティマ朝カリフ・ムイッズの言動を記録した、カーディ・アン・ヌウマーン著 *"al-Majalis wa al-Musawat"* の記述からは、現實のイスマール派イマームの像を再構成することができさる。

(一) カリフの個人的能力についていえば、彼は單に秀れているだけではなく、超人間的な資質を有しているかのである。しかし、そのようなカリスマ的資質とされているものの多くは、實は人間的な勉學や修練によつて獲得されている。

(二) カリフの國家内に對する姿勢をみれば、彼はまず教導者である。カリフは自ら信徒の教育指導にあたり、彼らの精神的向上と理論武裝を促す。またカリフは信徒の保護者かつ救済者であり、それは具體的には善政となつて顯われる。そうしたカリフの日常は、禁欲主義に貫かれ、國事に没頭する生活であつた。

(三) 對外的には、カリフはイスマール派によるイスラム共同體の統一をめざしており、イスラム、非イスラムを問わず、他の勢力に對するシハード（聖戰）の決意は固い。宮廷はイスマール派の最

大の據り所であつた。

### ナシヨナリズムとイスラム

——オスマン朝末期トルコの場合——

新井 政美

近代西アジアのイスラム復興運動ないしイスラム改革主義の展開については、これまで、イラン及びアラブ地域を中心に論じられることが多かったように思う。それらの地域では、多くの場合、反帝國主義運動がイスラム復興運動とほとんど同義であつたり、あるいは、民族運動の指導者が同時にウラマーであつたりした。それらに對してトルコの場合、ナシヨナリズムはイスラムの批判を浴びながら成長した。さらに、アタテュルクによる國家建設が、イスラムを徹底的に排除する形で行われたため、近代トルコにおけるイスラムは、せいぜいアブデュルハミト二世の汎イスラム主義がとりあげられる程度で、トルコ人が實際にイスラムの改革に眞剣に取り組んだことや、あるいは、トルコ人ナシヨナリストがアタテュルクのようにイスラムを敵視する態度をとつてはいなかつた點については、とりたてて論じられることがなかつたように思われる。

本日の發表では、オスマン朝末期におけるイスラム改革主義の展開を跡づけるための第一歩として、まずオスマン人一般のイスラム觀と、その觀點からのナシヨナリズム批判とを検討して、ナシヨナリズムが興起する時代の思想風土を瞥見する。續いて、ナシヨナリストの反批判を吟味することによつて、彼らのイスラム觀、及びイ

スラムの現状に對する彼らの考え方、そして、できれば、彼らの改  
革案までをも概観してみることにしたい。

# トルファン・ウイグル人社會の一斷面

梅 村 坦

近年、ウイグル文書の研究は佛教關係のものを中心として、内外  
で次々に成果があげられている。その一方で、十世紀以降ウイグル  
人たちがトルファン盆地をはじめとする中央アジアの諸地域に築き  
あげていった社會の特徴についても、斷片的ながら既にいくつかの  
事實が明らかになってきており、そのいっそうの解明のためにウイ  
グル俗文書はなお大きな利用價值を持っている。今回は、十三〜十  
四世紀のものとなる一群のレニングラード所藏の文書を検討して  
みたい。すべてなんらかの形で解讀研究が發表されているものであ  
るが、それらの内容を相互にこまかく比較検討してみると、ある一  
族とその周邊の人びとの生活がうかがひあがってくる。彼らはトルフ  
アン盆地を支配する權力の下で地主として、奴隸主として、あるいは  
商人として生活するものもあつたが、一族の中で土地の賣買をおこ  
ない、またかなりの借金をして葬式をだしたり結婚式をおこなう  
など、社會のしきたりどおりに生きていた。これらの事實の分析か  
らトルファン社會のある程度の實態が判明するが、人びとの生活を  
歴史的に位置づける方法についても考えてみたい。

## 陳の江總と佛教

吉 川 忠 夫

陳の江總（五一九—九四）は、浮豔の文學と酒色に耽溺し、つい  
に亡國をまねいた陳の後主陳叔寶の宰相として、かんばしからざる  
評判を得ている。いまそのことはしばらくおき、江總の生涯は佛教  
と深い關係で結ばれている。晩年の江總が攝山棲霞寺の慧布と親し  
く交わり、その因縁から「攝山棲霞寺碑」を書いた次第は、拙稿  
「五、六世紀東方沿海地域と佛教——攝山棲霞寺の歴史によせて——」  
（『東洋史研究』四二—三）に述べた。濟陽考城の江氏はそもそも  
篤く佛教に歸依した一家であり、父の江紇は建康に慧眼寺を創建し  
た。また江總は梁末に侯景の亂を避けて以後、陳の天嘉四年（五六  
三）にいたるまで、吳、會稽さらに嶺南の各地を轉々とするが、會  
稽で身を寄せた龍華寺は六代の祖の江夷の創建にかかる。そして舅  
の蕭勃、あるいはまた歐陽頔に身を寄せた嶺南滞在中に、江總は唯  
識學を傳えた眞諦となんらかの交渉をもつたものと推察される。歐  
陽頔と歐陽紇の二代こそは、嶺南における眞諦のパトロンであつ  
た。歐陽紇は歐陽詢の父である。

以上のような江總と佛教との關係を通じて、陳代の佛教の一端を  
瞥見する。